

石川弘義

成城大学教授

妻からの贈りもの

海竜社



石川弘義
妻からの贈りもの

海竜社

〈著者紹介〉

石川弘義（いしかわ ひろよし）

1933年、東京生まれ。一橋大学社会学部卒（社会心理学専攻）。成城大学文芸部教授（社会心理学・大衆文化論担当）。

著書・『欲望の戦後史』（太平出版社）『欲望の構造』（誠文堂新光社）『日本人の性』（文藝春秋）『子供をダメにする母親』高木俊彦共著（海竜社）他。

妻からの贈りもの

定価 一、一〇〇円

昭和六十一年一月十五日 第一刷発行

著者 石川弘義

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ九ノ二（郵便番号）一〇四
電話 東京（〇三）五四二―九六七 一 振替 東京―四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しいでください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© 1986, Hiroyoshi Ishikawa, Printed in Japan

ISBN4-7593-0137-2 C0095 ¥1100E

目次

妻が帰らなかった日

妻が帰らなかった日——6

絶望との闘い——17

悲しみの消化作業——28

人の情けが身にしみる——38

無言の帰国——47

支え合った夫と妻の二十四年

花と音楽につつまれて——56

二人とも若かった、貧しかった——69

頑張り母さんと息子——79

分かち合った二人三脚——88

父と子の台所

男二人のニューヨーク暮らし——96

暮らしを合理化する ————— 105

もう一つの転機 ————— 116

男が暮らしを見つめる時 ————— 128

男の食卓 ————— 139

熟年の出会い 新しい家族

一通の手紙 ————— 146

お正月のプロポーズ ————— 157

再婚のごあいさつ ————— 164

新しく構築された家族 ————— 173

五十歳から再び二人三脚 ————— 181

あとがき ————— 189

ブックデザイン——三田恭子

妻が帰らなかった日

妻が帰らなかった日

和子が帰らない……

時計の針は午後十時を回っていました。

ちょっと遅すぎるんじゃないか……。

さっきから徐々に増していった不安は息子の登もおなじらしく、私たちは顔を見合わせました。私たちは和子の帰りを待っていたのです。三人で夕食をしようという約束で、コロンビア大学の学生寮にいる登がアパートへやってきたのは四時頃。

「まあ、酒でも飲むか」

と、二人は水割りを飲み始めました。

和子は今朝、ジャパン・ソサエティの英会話教室に出かけていたのですが、おそらく帰りに友人宅に寄ったものと思われました。わが家の夕食時間はかなり自由で不規則でしたから、和子

が六時や七時に帰らなくても全く気にもならなかったのです。

酒を飲んでしゃべっていると、気がまぎれたせいでしょう、ふと気づくともう九時でした。はじめて、「それにしてもどこへ寄ったのかなあ。よほど話がはずんでいるのかな」と考え始めましたが、それ以上に思いつめることもなく、ただ、

「電話ぐらいあるはずだがなあ」

と、不審に思った程度でした。

ニューヨークに来てから日も浅いことですから、彼女の友人といえど大体見当がつかず。あの人のところじゃないかな、とさっきからちらちらと思い浮かぶ顔があつて、そこへ電話をかけたみました。しかし、何十べん鳴らしても応答なしです。

そうして、また飲みなおしながら十時過ぎ……。

私たち一家がニューヨーク暮らしを始めたのはつい三週間ほど前、一九八三年九月十二日のことでした。私、妻の和子、一人息子の登の三人、そうして、わが家族同様の老犬、バックがチーム・メンバーです。

私は一年間、コロンビア大学の東亜研究所の研究員として研究生活と、ニュージャーシーのラトガース大学での講師としての生活をする事になっていたので。登は英語の勉強と卒論のデータ集めが目標の一年間です。彼は都立大で社会人類学を専攻していますが、八月にコロンビア

大学のALP（アメリカン・ランゲージ・プログラム）という語学コースに入るための選抜試験を受けに来て、それが終わるといったん帰国、それから一週間ほどしてまた出直してきたのです。が、これ、実はバックのためだったのです。

十一年の生活をともにしたバックを、東京へおいてくるなどということは到底考えられない。で、ニューヨークまで一緒に飛んでくることになったわけですが、このイヌのご主人さまが登なのです。バックをおとなしく飛行機に乗せるためには登が必要ということで、イヌ好きでない人の目から見たら、およそ馬鹿げた行動をとることになったのでした。

住まいは、コロンビア大学が用意してくれたバトラー・ホールというアパートです。

三人のニューヨーク暮らしが始まった

和子にとっては、これが三回目のニューヨーク。一九八一年、八二年と続いて一カ月ずつくらい、私の調査の仕事についてきて一緒に過ごしました。八一年はサブリースという居抜きのままアパートを貸すおもしろい習慣を利用しました。いわばアパートの又借りですが、一カ月で八百ドルでした。これがたまたま今度のアパートのあるコロンバス・アベニューのすぐ近くだったのです。

ニューヨークといえば五番街、ということになるようですが、実際には五番街以上に人気のあ

るのがこのコロンバス・アベニューです。五番街は十時頃になると店が閉まってしまうのに、ここはさまざまな店が揃っていて、午前三時頃まで賑わうのです。

和子はこの街がすっかり気に入って、よく出歩いていました。さらに翌年もまた一カ月ほどホテル・オルコットで過ごしています。あのジョン・レノンの悲劇のあったダコタ・ハウスの一軒おいて隣りのホテルです。こうして、ニューヨークの地理も一応わかり、自由に歩き回る味を覚えた和子は、今回の一年間の滞在をどれだけ楽しみにしていたことでしょうか。英会話を本格的に勉強したいと張り切っていました。

十二日夜、私たちはアパートに着くと、今夜の食事を求めて、早速買い出しに出かけたものでした。

バトラー・ホールはモーニング・サイド・ドライブ近くのアムステルダム街の一一九丁目。ほとんどコロンビア大学のキャンパス内といった感じのところにあります。少し遅いせいか、近くにスーパーが見当たらないので、タクシーでブロードウェイの九六丁目辺りにいき、簡単な夜食を買いました。

このアパートの台所は、皿など食器のセットも一応ついています。東京から送った船便の荷物が着くのはまだまだ先のこと。粗末なプラスチックの皿ではありますけれど、その皿の上に買ってきた夜食を並べ、私たちは多少はしゃぎながら水割りで乾杯し、お互いの健康とニューヨーク

生活の幸福を願ったのでした。

私たちの部屋は十四階です。窓からはエンパイア・ステート・ビルディングが見えます。和子は窓辺に寄って感慨深げに長いこと眺めていました。登がインタナショナル・ハウスという大学の寮へ帰っていったのは十一時頃だったでしょうか。

それぞれの期待に充ちたニューヨークでの一年間はこうして始まったのです。

和子の英会話は決して上手とはいえませんでした。持ち前の明るさと愛嬌とで、バトラー・ホルルのオフィスの人や守衛さんたちと楽しげに挨拶を交わしていました。

英会話教室へ出かけたつきり……

私たちのニューヨーク暮らしが本ぎまりになったのは、約一年前くらいだったでしょうか。和子はそれから実に積極的に、英会話の勉強を始めました。ラジオ、テレビの英会話講座、自宅にアメリカ人を呼んでの会話の勉強、アメリカ大使館の職員がやってくださっていた個人的な勉強会等々。そうして、玉川高島屋での「ヴィッキーさんの英会話教室」では素敵な友だちが数多くできたせいもあって、毎日が楽しかったようです。

彼女はニューヨークでも、早速英語の勉強を始めようとしていました。「ニューヨーク便利帳」という日本人向けの情報雑誌を、ロックフェラー・センターの紀伊國屋書店から買ってきて、あ

ちこち電話をかけていました。

その結果、ジャパン・ソサエティの英会話教室を探し出し、多少無理をお願いした形で入れてもらうことになったのです。

その日、十月四日（火）の午前十時、ジャパン・ソサエティの語学プログラムを担当する佐々玲子さんという方とお会いすることになりました。

実は私は、ジャパン・ソサエティには、その前年にお邪魔したことがあるのです。NIRA（総合研究開発機構）と共催した大規模なシンポジウムに招かれて、一週間、ニューヨークに滞在したのでした。

ですから、その朝、私はこの会で知り合った人たちへの挨拶と顔見せも兼ねて、彼女をタクシーに乗せて同行したのでした。

午前十時、佐々さんとお会いし、彼女は十時十五分からのクラスに早速入れてもらうことができました。

「よかったわ」

多少、不安を感じていた和子は、ほっとした様子でした。

「じゃあね」

明るい笑顔を残してクラスに入っていく彼女の後ろ姿が、生前に見る最後の姿になってしまっ

たのです。私は、もう一度、佐々さんのオフィスに引き返し、会長のマッケクロン氏やオフィスの人たちと雑談をして、昼前にアパートに帰りました。そうして午後は、コロンビア大学図書館に調べものに出かけ、夕方帰ってからは、まもなくやってきた登と二人で、和子の帰りを待っていたのでした。

和子はルーズベルト病院にいた

「おかしいよ、遅すぎる……」

登もつぶやきました。

時刻はまもなく十一時です。

夜のニューヨークでは女の一人歩きは危ないといわれていますが、彼女は危険な地域は心得ているはずですから、そういう心配はしませんでした。しかし、何かわからないけれど、事故が起きたのではないか……。ともかく佐々玲子さんに電話をしました。

和子はレッスンを終わってお昼頃、ジャパン・ソサエティを出たということです。

「事故なんて滅多に起こるものではありませんよ。きっと、どこかへお寄りになって、まだ地理に不慣れでいらっしゃるから、帰るのに手間どっていらっしゃるんじゃないでしょうか。もうすぐお帰りになりますよ」

佐々さんの明るい声の励ましは、一瞬心強いものに感じられましたが、しかし、不安はつる一方です。

そこで、「まさか」と思いつつも、日本の一一〇番に当たる911に電話をかけてみました。約二十分ほどすると、警官二人がパトカーでパトラー・ホールの前に到着しました。

警官が電話とハンディ・トーカーを使いながら、あちこちへ問い合わせてくれる間も、いま帰るか、いま帰るか、私は彼女を乗せた車の影を求めました。しかし、その甲斐もなく約二十分後、ルーズベルト病院に和子らしい東洋人女性が、救急車で収容されていることが判明したのです。

とるものもとりにあえず、ともかく私一人パトカーに同乗して、病院に向かいました。途中、車は第二〇分署にちょっと寄り、それからルーズベルト病院に着きました。玄関からどういう道順で歩いていったのかは全く記憶にありません。途中でウォーター・クーラーから水を一口飲んだことだけははっきりと憶えています。口がカラカラなのです。警官は茶色の大きな紙袋を持ってきました。所持品、衣類などの確認です。中に入っていたバッグや靴、パンタロンスーツやピンクのタンクトップは、他ならない彼女のものでした。

「まさか」が現実となってしまうのです。

「無事であってほしい！」

私は、ただひたすら念じ続けました。

ルーズベルト病院は九番街と十番街の五九丁目。のちに知りましたが、マンハッタンでも最もすぐれた病院の一つです。ですからここへ運ばれた和子は幸運でした。

彼女はICU（集中治療室）に寝かされていました。

枕元の人工呼吸器に助けられてですが、静かな呼吸をしていました。大きなフイゴみたいな機械が文字どおり機械的に動いています。顔の色艶もよく、すやすやと眠っているような安らかな表情です。ある種のほっとした思いがありました。しかし、枕元にある血圧や呼吸や脳波の状態を示しているブラウン管がことの重大さを有弁に語っています。午前一時半には、登も到着。

しかし、担当のドクター・グティアレスの説明は次のようなものだったのです。

「これは重大な脳出血で、はっきりいって望みはありません。高血圧が原因の一つであろうと思われるが、直接的な引き金は何だったかは不明です。CTスキャンで検討したところ、脳の下部と左側に大きい出血が見られ、胃にも大量の吐血をしています……」

絶望なのか、可能性はあるのか

私は全身から血の引いていく思いで、その宣告を聞きました。グティアレスという名のしめすように、メキシコ系かコロンビア系と思われる、どちらかというと小柄なその女医が、なまりの